

今（平成14年2月）テレビでは「利家とまつ」を放映しております。私は都合があって毎回見ているわけではありませんので、話の筋は十分にはわかりません。しかもドラマ作家の脚本があり、娯楽番組的になっておりますので、歴史学者として解説をするわけにもいきません。しかし昨年大河ドラマに出ていた北条時宗の兄時輔は歴史上、死んだのですが、朝鮮半島に行ったりして、あまり夢物語にされますと、視聴者の中にはあのテレビドラマを歴史上の真実と真に受けている方々も多いわけですから、ちょっとあそこまでしていいものであろうかと思ってしまう。だから今日のお話はドラマの筋をあまり考えないようにしていきます。

（1）前田利家の足跡と時代

前田利家という人は加賀百万石の基礎を築くわけですが、どういう歩みをたどってそこまで行ったのか。そこまで行くには、当時のどういう社会の問題があったのか。

戦争ですから主従の関係とか、軍事力の編制とか、政治的な外交とか、いろいろと問題があると思うのですが、そう言うことの基礎になるような問題を、歴史の学問上から考えて行こうと思います。今までの学問の中で明らかになってきた事を皆様にお伝えすれば、ドラマも又新しい見方が出来て、より一層面白いのではないのでしょうか。

私はこの講演を頼まれていたので「利家とまつ」の一回目を見ました。ドラマの揚げ足をとるようで悪いのですが、少し変に思ったのは、前田家の若き利家が出てくるわけですが、その父が今名古屋市にある荒子という町にお城をもった荒子城主として出てきます。城は、現在あるわけではありませんから、ドラマの城は創作みたいなものです。利家の父、これも利春か利昌かはっきりわからないのですが、今はこだわらない事にしましょう。その父を、前田家の家老なるものが「お館様」（おやかたさま）と言っているのです。「お館様」という言葉は、いくら戦国時代であってもむやみに使いません。「お館」といいますのは武士がおこってきた平安時代の終わりの頃からずっと、中央政府から国々に派遣された国司をさす言葉です。今でいえば県知事にあたりますね。鎌倉時代になりますと守護がおかれまます。守護のことを御家人の侍たちは「お館」と言って、それより下の小さい親方たちをそう簡単には「お館」などとは言わないのです。前田家は徳川時代の大名家の家老みたいな者が居るほどの家ではありません。それでは前田家とはどんな程度の家として描かれているのか。そう思って見ていたら、松さんが出てきて屋敷のそばの畑で、菜っ葉なんか取っている所がでてきます。意外に農民的な場面が出てきました。ちょっとちぐはぐで前田家のイメージが皆さんにもわかりにくいのではないかと思います。気にして見ませんと関係がないのですが、私のように歴史の研究をしておりますと、この辺りがあいまいだと思います。

お城の城主という言葉を使っていますが、当時の城がどういうものかといいますと、ほとんどの方は、今も残っている徳川時代の天守閣等を思いおこすでしょう。徳川時代の藩というのは全国で250から300位ありまして、1万石以上は大名ですが、藩主が城をつくるのを認められるのはほぼ2万石から上ぐらいで、城を持たない大名もたくさん居るわけです。その人たちは城ではなく陣屋というものを持っているだけです。全国に残っている城は姫路城とか、松本城とかそんなにたくさんあるわけではなくて、ましてその中に荒子城なんかが入るわけはありません。城というものは原則として鎌倉時代にはまだないのですが、南北朝の動乱の時代ぐらいからつくられ初めまして、室町、戦国と急激に増え出します。でも戦国時代の城は、江戸時代のものとは全くちがいます。この2、30年間文化庁の仕事として府県別に確認され、現在登録されているだけでも大体各府県それぞれに1000近くもあります。そうなりますとちょっと丘に登ると、向こうの丘にも城がある、こちらにもある、と言うぐらいに城がたくさんあるわけです。おそらく全国には数万の城があったろうと言われております。江戸時代の村は今の大字ですね。それは全国で8万あまり位だろろうと言われております。そうすると村2つあたりに中世から戦国時代の城が1つはあったということになりますから、すごい数です。今は城跡、伝承とか、城に関わる地名だけしか残っていないものも多い。あるいはいくらかでも土塁や堀があるものもある。合計すると、膨大な数ですね。

それらをつくったのが誰かと言うと、それこそが前田氏のようなレベルの者であろうと思います。前田氏を江戸時代の城持ちの大名と考えると大違いで、どちらかと言えばまつさんが菜っ葉を取っている、あの方が真実に近く「お館様」と呼ばれるとか、家老が居るとか、やたら綺麗な着物を着るとかいうことではないのです。前田氏は、その頃、荒子という村の中に住んでいて、私が類例をたよりに想像すると、村の中の有力者であって、かなり大きな屋敷を持っていたと思われまます。戦国時代になって、だんだん物騒な世の中になってきて、自分で争いをしなくても、外から脅かされる危険はたくさん有るわけです。そうすると自分の屋敷の廻りに堀をつくるとか、堀り上げた土を盛りあげて土塁を作るとか、あるいは大きな木を切り倒して入り口を防ぐとか、入り口をまっすぐつくと入りやすいので食い違いの入り口にするとか・・・。

お城の入り口は虎口と言うのですが防衛を考えて、形を工夫しております。ふだん住んでいる屋敷を、そのままにしながら防衛構造を考えたのが城なのです。だから江戸時代のような高度に発達した城を考えるとかえってわからなくなってしまう。

(2) 不安定な身分秩序と主従関係

荒子の城主だった前田みたいな家は侍階級の全体の中でどのようなランクに位置づけられて、その他のランクの人とどういう関係を持っていたのでしょうか。侍集団の頂点には地域の大名がいるわけです。前田氏も、信長の家来の1人となりますが、そこで侍は、大名と前田氏のような地付きの土豪みたいな者に2階層にだけわかれていたわけはありません。大まかに区別すると大名、国人

(こくじん)、村の小領主(土豪)の3階層です。大名と言うのは武田信玄とか北条氏康とか1国を支配するような大勢力を持っているものです。大名クラスの多くは、前の時代はその1国の守護ですね。大名たちは自分の子飼いの侍たちだけでは力が足りませんから、その地域の間接クラスの侍である国人たちをひき入れていくわけです。その地域の国人を媒介しなければ、支配の徹底はできないわけです。すべての者を軍事的実力で討ち従えてしまおうというようなやり方では支配はできません。国人たちも同じような意味で、国人一族だけではその領地を支配できないので、村々にいる前田みたいな土豪クラスの者を家来にする。大名、国人、土豪というタテの系列関係は難しいけれど大事な問題です。

それはどういうことかと言いますと、大名は一度勢力を広げていって、その中にいる国人たちを服従させれば、もう安定した支配ができるかと言えばそうではなく、国人は大名に対しては、一応自分より上ですので儀礼は表しますが、もし隣の大名についての方が得だと思えばたちまち転じてそちらにつきます。だから大名たちの支配地域、その国人たちの主従関係も安定したものではありません。「国人は主君を選ぶ」ことができるのです。江戸時代には、そんなことは全然理解できないでしょう。主君の方が絶対強力ですが、戦国時代では、国人の方が、あの大名は有望だと思えば、それにつこうという考えですから、大名が失敗したり、なんらかの意味で信頼を失えば国人は別の主君を選ぶという流動性があるわけです。大名の下で国人が戦争に行っても、途中で陣払いして帰ってしまう例はいくらでもある。とても信じられないような関係がそこにはあります。そして村の土豪、小領主も一番近い土地の国人に主従関係をとっているかという必ずしもそうではなくて、土豪も国人を選ぶという関係があります。

大名から見て家来の中には一門・譜代・国衆・外様という区分があります。大名から見て信頼できる度合いとか、あるいは血縁関係であるとか、早くから服属して信用ある家来とか、その人に対する身分や信頼度で、区別をしているわけです。そういうことを考慮しつつ家来をだんだん編制していきます。大名が大きな国を支配するには、強い軍事力が必要です。しかし広い地域を統治するわけですから農民、民衆を支配する為、経済問題をきちんと処理できる、納得される裁判をやるか、公権力にあたるような諸機能を遂行していきます。そうでないといくら大名が軍事力だけ強くてもやっていけません。そういう意味で家来を編制する場合、1つは当然軍事能力ですが、その他いろいろな種類の任務をもつ家来の編制も大事になってきます。

一つは、統治機能をどのように発揮できるか、たとえば土木事業をもっぱら担当する役人、財政を管理できる役人としての仕事です。いろいろな家来がいるわけで、その能力特性をいかに活かすかが大切です。北条や織田のような大きな大名では家臣たち、すなわち色々なレベルの信頼関係や能力の者たちを、どう編制していくかが問題です。それがわかりませんと織田家の中で前田がどういう立場にいるのか、秀吉との関係はどうなっていたのか、ちょっとわかり難

いわけです。

そこで考えてみますと軍事力の面ではこういう風になっているわけです。まずは大名そのものの直属軍事力ですが、その他一門とか国人もそれぞれ独立の軍団を持っているのです。国人たちの軍団はその一族だとか郎従で形成されています。郎従とは前田家なら前田家に一体化しているわけで、独立の侍と言うほどのものではありません。当時の家は今の家族と違って非血縁の者も、家中に入りこんで一体化しています。そういう人もたくさんいる訳です。その他に前田は荒子村に住んでいる他の土豪みたいな人を家来にしている。その人たちが荒子衆といいいます。荒子衆の中心が前田家ですね。そして、荒子衆のそれぞれにも郎従みたいな人たちがいるわけですから、戦国時代と言うのは、近代の軍隊とは違っていています。近代の軍隊というのは軍司令官がいて兵隊を統一的、直接的に編制しているわけです。これに対して大名の軍隊は主だった家来がそれぞれ小軍団をひきいて参加しているのです。家来がみんな独立小軍団をもっています。だからこの国人たちも一族・郎従・家来をたくさん持ち、大名との間に一応主従関係は結んでおりますけれど今度の戦争で負けそうだとか、主君が頼りないと思ったら別の大名についてしまう。例えば信長がすべての軍隊を統率し、一つの軍事組織としての指揮命令組織が完成しているのではなくて、信長のもとに服属してきた国人たちがそれぞれの独立の権限を持って独自の行動をするわけで、場合によっては陣払いして帰ってしまうというわけです。少し情けないような話ですが、それが戦国時代の軍事力の現実なのです。

(3) 前田家と信長、秀吉

そこで前田家の話に戻して考えてみますと、前田を中心とした荒子衆は、農村武士の小グループです。武士といいましてもふだんは農業も営む者たちです。でもちゃんと武器も持っています。このころ、織田信長自身の格式・地位は、せいぜい国人クラスなのです。そういうクラスの人から呼びかけがあった場合に、それに応じて行くも、それに応じないのも自由です。私かわからないのは前田利家が15歳の時に信長に仕えて知行50貫文を貰った事になっていますが、子供だけが仕えるわけでもありません。父の時代、あるいはもっと前から織田家の家来筋になっていたかどうかはわからないのです。でもだんだん信長の力が強くなっていく時代ですから、そういう状況の中で信長に仕えるようになっていたと考える方が自然ですね。だからそんなに古くから織田家と前田家の間に主従関係があったわけではないと考える方がいいでしょう。

その後、利家が信長に仕えてどうなったかといいますと、せいぜい馬廻りぐらいだったと思います。馬廻りというのは信長の手兵です。具体的な例をあげますと、小田原北条氏の家来になった宮城氏と言う土豪がいます。前田氏より大分上だと思われませんが、284貫文の知行を貰いました。その人は本人が騎馬に乗るのはもちろん、その他に7人がやはり馬に乗る人、3人が旗持ち、1人が指し物持ち、徒歩の弓持が1人、鉄砲持ちが2人、その他歩兵が4人、槍持17人合わせて36人でした。その人は豊島・練馬あたりに勢力をもち、古文書をたくさん残している家ですから確実です。その頃前田氏は36人も家来を直接持つ

ていない状態だったに相違ありません。そうすると前田氏は武将級の人ではないわけです。利家は第一段階では自分で走り回る程度の馬廻りで、小身衆といわれる人だったと思われれます。大身衆というのは自分で軍団を持っている国人級の人です。近代の軍隊で言えば連隊長クラスのもので、それから母衣衆（ほろしゅう）という者がいました。信長の時代には赤母衣衆、黒母衣衆という者が20人位ずついたようです。母衣衆は何をしたかと言いますと、信長の命令を伝え戦陣を走り回る。多くの軍団がそれぞれ独立行動しているわけですから、軍事指揮命令を伝える仕事です。だから重大な仕事で馬廻りでも母衣衆というのは信長の強い信頼があったのです。織田は天下統一の為に精力的に戦ったわけですが、利家はそれに全部付いて行っています。

決定的な転機になったのは、浅井・朝倉との戦いです。信長にとっても重要な戦争だった。天正元年のことです。利家は30代の半ばになって、軍団を自分で率いる武将とまでは行ってなかったけれど、手柄を立てるたびに恩賞を貰い、家来を増やし段々大きくなってきたことは事実で、信長にとって利家は軍事的な能力に優れた重宝な存在となっていきました。ですから戦の時にはいつでも連れていくわけです。

一番大きな転機になったのは、やはり一乗谷（いちじょうだに）で天正元年に朝倉氏を滅ぼし、続いて浅井氏を滅ぼして柴田勝家を越前国の一国支配の責任者に任命した時です。これは軍事的なトップであると同時に統治権限も委ねるわけです。信長はその時に一国支配の心得というべき重要文書を作って、これに従って万事を行なうよう命じました。でもその時に柴田勝家一人に越前を一切委ねるのは、ちょっと危ないと考えて、利家を含む3人の家来に目付け役のような形で越前の2つの郡を割いて与えました。利家はそういう意味では信長の手足となるような形で、柴田の補佐役の立場になりました。そこまでは、軍人的な行動を主として行くわけです。利家は信長の支配のため官僚的立場でいるんな商人との折衝をやるとか、検地をやるとか年貢を取るとかといった統治機能のなんらかを分担したという形跡は見られません。軍人的な道を歩んでいたということは確実に言えるでしょう。

ただ利家の一生を考えると、それで終わったわけではないですから、その後自分の道をどう切り開いていったかが問題です。第一の段階は織田の馬廻り衆。身近なところで主君信長の信頼を受けて、今言ったような活動をする。第2段階は本能寺の変があって、秀吉が光秀を倒す、そして賤ヶ岳の合戦になります。その時には、利家は柴田側についている。柴田は賤ヶ岳で敗れて越前に逃げる。その段階で利家はいち早く秀吉側に転ずる。ここが人生の大きな岐路だったでしょう。一転して柴田から離れて秀吉の家来になるわけですが、昔は秀吉と利家は同輩だったわけで、どちらが上だったのかわかりません。信長が死んでも織田家中の勢力がまだ残っておりますから、秀吉は利家を抱きこみたかったでしょう。そういう中で、すばやく利家は秀吉に結びついた。悪く言えば要領がいい、よく言えば見とおしのきく男です。

越前は信長の時代から続いていた一向一揆の勢力が強いところで、今日でも浄土

真教の教勢が強い所です。北陸というのは東京に住んでいると、遠い所のような気がしますが、京都から見ますと非常に近い所で、琵琶湖を越えるとすぐ若狭です。若狭と越前とはつながっていますから、中央にとっても軍事的に特に重要な意味がある。信長の時代には越後の上杉の脅威がありました。ですからその防衛とするために信頼していた柴田を送り込んでいたわけです。信長に代わった秀吉にしても、軍事的には重要であり、しかしながら情勢的には不安定であったこの地方に誰を配するかということで、柴田の補佐役であった利家を、早いところで北陸支配のトップに位置づけていくわけです。これは、秀吉の重要な戦略の一つだと思います。

西の方では、毛利がいちばん恐い勢力です。それに対抗するために宇喜多秀家という岡山の新興勢力を登用します。宇喜多はあとから浮上してきた家で、歴史はあまり古くないけれど、秀吉は目を付けて利家の娘の豪を養女にして、宇喜多秀家に見合わせるのですね。秀吉の養女にされ、また秀吉の命で嫁がされる。二重に政略の犠牲になった。秀吉からすると、東方の家康は力があり危険な存在です。織田一族はだいたい秀吉に蹴落とされましたから、家康に結びつくようになります。そういうわけで東に大きな不安を抱いていますから、西と北をきちんと固めるため、宇喜多と利家が重要な役割を持たされ、急速に引き立てられて、大勢力に育て上げられるわけです。宇喜多秀家は、備前・美作57万石の大きな大名になった。前田利家もこの頃になりますと、秀吉の天下支配戦略の最も重要な一環として北陸の中心に位置づけられるわけです。

ここで前田家の立場は、がらっと変わってきます。信長の最後の頃にはすでに能登の支配を任せられるようになりますが、さらに秀吉のもとで能登、加賀を支配する。そのあと越中までも領知するようになる。そのような大きな大名になったのは秀吉の時代です。秀吉には木下藤吉郎の時代から子飼いの家来がいるわけで、利家は、そう言う人とは違うわけです。どちらかと言えばライバルのような関係でした。その利家が、秀吉体制の北の要（かなめ）として、全国支配の中で位置づけられました。それには利家自身の人間的な魅力といいましょうか、信頼感もあったと言えらると思いますが、やはり秀吉の全国支配の中で幸運にもとりわけ大きな役割を与えられた。それが前田の加賀百万石につながる筋道だったでしょう。

そういう意味で、秀吉の時代になりますと利家の立場は大きく変わってくる。そのことを一番よく示しますのが、利家の位官昇進です。天正14年には従四位下左近衛少将の官を与えられる。天正18年には従四位下参議、文禄3年には従三位権中納言、慶長元年には従二位権大納言という高い位官にのぼりました。もちろんすべて秀吉の口ききです。

朝廷の位官は形だけのようですが、秀吉の立場からすると家来たちの位置づけ、上下秩序の確定という大きな意味があります。天正16年、聚楽第が出来て、秀吉は天皇を招いて自分が天下人になった形を示します。その席に利家も同席をする。すなわち利家が秀吉に一番近い位置にいる人という形が整えられました。秀吉は信長の死後、天下人になってわずか6年の間に、高位高官に駆

け上がっていきませんが、利家も同時に駆け上がって行きます。天皇から、位や官職を与えられて高い地位に就くことは、実力本位の戦国の動乱の中では、あまり意味がないように見えるかもしれませんが、しかし、中央にいて、天皇から位や官職を与えられることは、単なる地方の大名ではない、天下人として中央政権の中枢にあることを意味します。秀吉のやり方としては、伝統的な権威の頂点としての天皇の地位をつぶすのではなく、自分がそのもとで関白になることによって、全ての勢力をその傘下に組みこもうとしたわけです。武力で正面から対立するより、自分が天皇の擁護者としてすべてを包み込もうとしました。

でも、この時にも利家より、いつも位官が一つ格上にあったのが家康でした。秀吉の中央政権の形としては、秀吉が関白として頂点にいて、その下に家康や利家が最も高い位置にいるという形。ここで利家はもっぱら武将=軍人であったこれまでと全く違う状態に置かれたわけです。信長の時代の利家と、秀吉の時代の利家とでは、全然意味性格が変わってきます。

その後どうなったかですが、秀吉は晩年になって、やっとの思いで秀頼誕生にめぐまれました。その時に自分の死後の事を考えないわけにはいきません。利家と家康を、どう扱えばいいのか。そこで利家に秀頼のお傅役(もりやく)の地位を与えて、大阪に常駐せよと命じました。利家は文禄4年にこういうことを書いています。秀次が秀吉に殺された時です。はっきり理由はわかりませんが秀次が秀吉のあとをねらって秀頼を疎外するであろうと不安を抱いていたようです。その時の史料によりますと「不断に在京致し 御ひろい様へ御奉公申すべく候、私として下國仕つかまつるまじき事」というのです。これは、利家が誓約書を作って秀吉から言われたように自分の領国である金沢には帰らないで、京都か大阪にいて秀頼のお傅役をするということです。そういう形で利家が家康と秀頼の緩衝剤と言いましょうか、むしろ秀頼の直接の保護者になるのです。家康、利家、宇喜多秀家、上杉景勝、毛利輝元の5人が最大の大名、五大老だと言われますが、その第2位です。伊達だとか島津だとか、遠隔地にいる外様の大名は問題にしない。直接政権の力が及ぶ範囲は東北をのぞく本州で、九州などはちょっと力が及びにくい。そうすると、その中の、大大名と言えば西は毛利であり、北は上杉である。そういう時に秀頼のいちばん近いところに利家を位置づける。これが秀吉の息子を残すためのいちばん最後の戦略です。

利家としては領国が気になりますが、在京しています。利家は関ヶ原の合戦の前の年に死にましたが、息子の利長は、なかなか状況判断がうまく、秀頼につくか家康につくかという瀬戸際で、秀頼につかなかった。利長の論理では、関ヶ原合戦が起こったが、これは石田三成や、毛利輝元がやっていることであって、何も秀頼が家康に向けて旗をあげたわけではない、秀頼は中立しているのだから完全に石田、毛利側につかなかなくてもよいというわけです。利長が石田、毛利側につかなかったことを高く評価して、家康は越中まで与えて、120万石におよぶ領地を手に入れた。いわゆる加賀百万石の時代は利長の時にできるの

です。

(4) 当時の嫁と実家の関係

話は変わりますが、少しまつの話をしてしようと思います。一つの問題として、戦国時代の女性についてよく言われるのは政略結婚で振り回され、一生、悲しい運命のもとに置かれたということです。確かに戦国の女性は大変なんです。秀吉が小田原の北条を攻めていた天正18年に前田利家も秀吉の命を受けて、北陸から関東に攻め込んだ。この時の史料によると北条方では八王子城を始めとする主な支城では、支城主の命令で、家来たちの夫人・子供を全部城の中に入れ、兵糧も全部城の中に入れさせた。村に残すと敵に取られるというよりも、家来たちが自分の兵糧を確保して敵方につく恐れがあるというわけで、とても厳しい掟がある。家族をそれぞれの家に残すと家来たちは家族にひかれて戦意がなくなる。だから家族ぐるみ城にいれ、運命共同体にしてしまうわけです。

城が囲まれた時は女性の仕事は大変なんです。炊き出しをやらなくてはならない。武器の修理、鉄砲玉を作る。味方が取ってきた首を洗って、ちょっとお化粧をして、上位の侍みたいに見せかける、にせ首作り等ですね。これが女性の仕事です、いいものではありません。

しかし結婚がすべて政略結婚かといいますが、そうとも言えません。いつまでも実家の方の糸が切れないで婚家へスパイになっているという説もありますがこれも一概に言えません。古い時代を考えると、鎌倉時代なんか北条政子の例で分るように実家の姓を名乗っています。だいたい実家の方の氏を名乗るのです。

藤原氏からくれば藤原の氏の女、氏女(うじめ)といい、中原からくれば中原氏女といいます。夫の家の姓ではありません。夫の苗字に変えるのはもっと後のことです。また、嫁入りする時に実家から持って来た財産も、夫人が死んだら夫のものにならないで夫人の実家にもどる。死ぬまで実家の糸が切れないのです。鎌倉時代の場合はこんな具合で実家とのつながりが濃かったのですが、それより後、だんだん夫の家長権が強まってくる。室町、戦国から徳川時代になるとさらに強くなっていく。明治時代は侍の世の中ではなくなったのに、さらに強化する形で旧民法ができました。明治時代の民法では女性に財産権はなく、妻は実家を離れ、夫に完全に従属するものとされました。

まつは実家優先から婚家優先に移り変わる移行期の女性ですが、婚家の為に奮闘したらしいですね。家康と豊臣の対立がだんだん激しくなってきました。利長が家康から疑われて討たれそうになる時、自分で人質になって江戸に行く。そして長らく江戸にいるわけです。それで前田家を救ったと言われています。まつの実家の話はあまり出てきません。大きな勢力の家ではなかったからでしょう。早くから前田家に養女にきて養われていたという話で、子供の頃から利家と一緒にいて、結婚したとなっています。私は別に否定する材料も知りませんが、確実な第一級の史料にはこのことは見あたらないのです。のちの家譜のような物に出てきます。

残っている肖像画を見ますと松嶋菜々子さんによく似ていますね、体の大きい胴長の堂々とした大きな女性ですね。どこまで本当かわかりませんが、人物的には腹のすわった女性のようなようです。鎌倉時代の女性とは違った立場、行動様式を取っていたともいえます。実家よりも婚家の方を大事にした。秀吉の重臣となった頃の前田家のような大名の家は自分の家族だけではなく、「家中」の人びとがいます。家中とは一門・譜代など親しい家来たちですね。前田家の権力中枢をなしている、そういう集団です。その人たちが家族を伴って前田の城の周りにいるわけです。そういう人たちをどうやって束ねて行くのか。彼らを心理的につなぎ止めていくことは、とても大事ですね。それにまつはたくさん子を生んでいるわけで、子供たちも成人するとそれぞれの立場が生まれる、それらをうまく束ね家中の内部崩壊を避けるという意味でも、まつの役割は大きかったでしょう。

質問：百万石というのは金沢と富山も入っているのですか。

応答：百万石と俗にいうのは加賀、能登、越中を含むもので、利長のとき120万石に達しました。でも三代目の時、越中富山10万石、加賀大聖寺7万石を一族に分藩しました。だから富山は江戸時代の加賀藩ではなくなるわけで、でも前田の支藩になっているわけです。支藩を立てるには幕府の許可を貰います。加賀の場合は藩も大きいですから家来の中にも1万石以上の人が何人もいました。

質問：私は富山の出身で、佐々成政がドラマによく出てきますが、あの頃の歴史的に、大きな意味があるのでしょうか。

応答：佐々というのは尾張の出身で信長の時代から、重んぜられていて朝倉攻撃や本願寺との戦いに活躍して越中富山を与えられたのですが、本能寺の変後、秀吉にだんだんと疎外されていくわけですね。地位がだんだん脅かされていきます。そのため、秀吉の時代になると家康や織田信雄(信長の子)勢力と結び、小牧長久手合戦の時、針木峠【越中立山沙羅峠】越えて家康方に味方した。秀吉に許されたものの、結局成功しなかったですね。肥後を与えられたのですが、国人支配に失敗して腹を切らされた。そういう意味では戦国で敗者の1人になったわけですね。でも越中で大きな力を持っていたのは事実です。

質問：利家が14才の時に50貫で信長に仕えたということですが、50貫とは、後の石高になおしたらいくら位ですか。

応答：簡単にはいくらになるかはなかなかはっきりしません。織田信長の場合貫高と田畠の面積との関係はわかりませんが、関東の小田原北条氏の場合史料が残っておりますので、正確にわかります。織田も多分そんなに変わらないでしょう。北条では田1反について貫高は500文という決まりがあるので。畠は165文です。従って1町歩は5貫文、だから仮に50貫といえますと10町歩の田地という事になります。

10町歩の田地とはどれくらいかといいますと、戦前の農民が農業だけで暮らす場合、安定経営ができる規模は1町歩前後です。今の1ヘクタールが安定農家の目安です。そうすると10軒分くらいです。その際、貫高というのはそこから取れる年貢量を指している。10町歩という面積を石高になおしますと、一反の石盛を平均的に1石3升とすると130石です。ごく機械的な計算ですがこうなります。ただこの石高というものは生産高を指しています。平均的に一反について、収穫1石3斗取れると、（今は4石くらい取れる所もいくらでもあるでしょう。）これに年貢率が四公六民程度ならば0.4を掛けて52石が年貢高になります。それが領主側からみた取り高になります。戦国時代の貫高というのは生産高を問題にはしていない。1反について500文取る年貢高のことですから、石高制度とぜんぜん算定基準が違いますが、大体の見当はつけていただけるでしょう。

質疑：鎌倉時代は女の人も相続権はあったみたいで、江戸時代は無くなったのですか。

応答：平安時代からそうなのですが、その頃は女性も男とあまり変わらない形で分割相続できるのが一般でした。それが、いつ頃から女性に対して、制限を与えられるようになったかと申しますと、だいたい鎌倉時代の終わり頃からです。たとえば侍の家で100町歩持っていたものも二世、三世と分割されていくと小さくなります。一族だった者も世代が重なればみんな独立していきます。誰を後継ぎにするかは家長が決めました。嫡子に選んだ人には多く与え、あとの人にも少しは与えますが、均等分割からだんだん遠ざかって行きます。そうすると女性の相続分も当然減って行く。南北朝以降だんだん戦乱が激しくなってきた、分割しない方が都合良く、分割すると身内の中からも戦争のタネが生まれようになってくる。そういう事で女性は一期分（いちごぶん）という形にして一代だけ与えました。死んだら自分の子供に相続させることは許されないで総領の所に返します。そのうちに一期分も与えたくないとなる。こうなると、家督を継いだ人に、女性を養うように親が遺言しておく。あの娘が困らないように、くれぐれもめんどろを見るようにということになる。家督を継いだ男子に財産権が集中していきます。徳川時代になりますと、もっと強烈になりまして、次男坊は他家の養子の口がないと知行がないから嫡子の所に居候している。

農家でもオジボーという言葉がある。オジボーとは叔父ぼう、厄介者のことです。女性だけではなく男性も同じような形で単独相続が進んで行きます。要するに家督を継ぐ人だけに財産が集中するわけです。嫡子だけが殿様から知行をもらうわけです。明治時代は嫡子(長男)単独相続をそのまま強めていく。江戸時代の農村では長男が家を継ぐということは、そんなに強くなかった。明治になってからは旧民法が家督制度つくりましたね。だから侍時代の習俗を明治の民衆生活の中に、持ち込んだというわけですね。

質問：佐々は利家より少し上の気がしますが、やはり土豪のような出身なんですか。

応答：私も良くは知りませんがだいたいそうだと思います。尾張の土豪だったのでしょう。秀吉は九州征伐の時に連れて行って、肥後のトップに据えたのです。でも地つきの国人達がいっぱいいる。それらをなだめて統合しなければいけないのに、着任してすぐに、その国人達の領地を取ったり、知行替えをやったり、検地を強行したりして、いっぺんにかねらの反発をかった。肥後の国人50人ほどが結集して大反乱をおこすわけです。秀吉は怒って腹を切らした。ですから佐々の最後は悲劇的です。秀吉は利口な人で、天下統一の時に本当に叩き潰したのは小田原北条氏だけなんです。島津でも伊達でも、全部取りこんでいる。小田原にもさんざん降伏を勧告したけれども、北条氏の氏政・氏直父子が自信過剰で天下の情勢を認識できなかった。

佐々のやり方は、秀吉の統一政策のポリシーから言えば違っていた。力の政策をやって失敗した。戦国の蛮勇の人だったけど政治家ではなかったということです。

最後にちょっと言い忘れましたけれど、前田家のことを勉強をなさりたい人は岩沢愿彦の「前田利家」（吉川弘文館2001）をごらんになるのがよい。この本は史料で確かめられる、信用できることだけ書いてありますから、これからはみ出したような話は、作家的な世界であるとお考えなさってください。戦国時代の基本的な関係などをお知りになりたい方は、永原慶二「戦国時代 上下」（小学館ライブラリー2000）をお読みください。